

2019. 6. 24

畑 啓之

「小保方晴子日記」はもはや「STAP細胞はあります！」とは主張していないが

「あの日」の「その後」である。STAP細胞はES細胞の混入が原因とされた。そのES細胞は小保方が研究室から盗んだものとして訴訟もされた。しかし、当時研究に責任を持っていたのは若山照彦（エイプリルフール先生）であった。

学位論文に関しては取り消しとなった。学位論文に「キメラマウス」が記載してあり、そのデータの補足ができなかったのが理由のようだ。学位取得は2011年（3月？）、理研でのキメラマウス作成成功は同年11月であるので、学位論文の元文を見ていない（原文を見る術がない）私には、学位論文になぜキメラマウスだったのか？が非常に不思議である。

刺激惹起性多能性獲得細胞（STAP細胞、Wikipedia）より抜粋

2011年11月に若山照彦の指導のもと、キメラマウスの作成に成功、2012年4月にネイチャーへの論文投稿を行う。しかし論文は不採用とされ、セルやサイエンスへも投稿し直すが、全て不採用にされてしまう。その後2012年12月に笹井芳樹、2013年1月に丹羽仁史が参加し、論文を再執筆。3月中にネイチャー再投稿。12月に念願のネイチャー論文2報が受理される。

しかし、論文発表直後から様々な疑義や不正が指摘され、7月2日に著者らはネイチャーの2本の論文を撤回した。STAP細胞・STAP幹細胞・FI幹細胞とされるサンプルはすべてES細胞の混入によって説明できるとし、STAP論文はほぼ全て否定されたと結論づけられた。

博士論文の不正調査と処分

早稲田大学の調査委員会は、「製本された論文を前提とすれば、学位を授与すべきでなかったが、大学の審査体制の不備で、いったん、授与してしまった以上は、大学で定められている『取り消し規定』に該当しない限り、取り消しはできない。今回のケースは、その規定に該当しない」との結論を記載した報告書を作成し、早大に提出した。

早稲田大学は調査委員会の結論を受け入れず小保方の博士号を取り消すと決定した。ただし、論文の指導および審査過程にも重大な欠陥があったとし、1年程度の猶予期間が設けられ、その間に小保方が再指導・再教育を受けたうえで論文を訂正・再提出し、これが博士論文としてふさわしいものと認められた場合は学位を維持する、としていた。

小保方晴子日記 (2018年3月)
2015~2016年

6月21日(日)

エイプリルフル先生にお願いしたキメラマウスの実験部分について、指導教官を通じて主査からコメントが来ている。「結果が偽陽性である可能性を否定できない。キメラマウスのデータをすべて削除するか、(厳密に条件を揃えた)さらなるデータを示す必要がある」。

この実験はNature論文で疑義がかかったデータと同じ実験。できる人は世界中でエイプリルフル先生しかいないという、当時の先生たちの判断のもとお願いした。実験条件の設定も専門家のエイプリルフル先生が決めてくれた。その実験に今になって新たな条件下でのさらなるデータを示すように言われても困ってしまう。

また指導教官からは、「(博士論文の)章立てが変わるのであれば、論文本体と同時に概要書の修正も必要」と伝えられた。以前ならものともせずになされた作業が今の私には大仕事のように立ちほだかる。

6月25日(木)

キメラマウスの実験結果の取り扱いについて悩んでいる。そもそもこの実験は私の博士論文の結論に影響するものではない。記載しなくても良かったのだが、将来につながる示唆に富むもので、卒業後はこの研究の続きすることが決まっていたため、当時の指導教官たちの進言のもと前回提出した論文では実験結果の章に掲載した。今回の審査の先生たちは強く疑っているが、私は今でもこの時点の結果は未踏の領域につながる可能性を持った非常に興味深いものだと考えている。しかし主査が求めるような違う条件下でのデータを今すぐ提出することはできない。今回は主査の提案に従い、実験結果の章からは削除する。その代わり、将来の検討事項として別の章に短く関連する記述を残そうと思う。念のため、この章立ての変更の問題がないか指導教官に指示を仰ぐことにした。

7月23日(木)

主査からメール。「7月10日に送っていただいた原稿について、主査の私と副査2名で検討しました。その結果をメールにてお伝えします。今月中に、これらのコメントに対してどのように対応するつもりかお知らせいただくとともに、コメントに従った修正版を作成してください」。指導教官からもメールが来た。「先生方からのコメントが来ましたが、よく検討してください」。本格的な再指導はいつ始まるのだろうかと思っているうちに、次の段階に入ったみたいで戸惑っている。

コメントを読んだ。科学的な質問というより、大きな要求が二つ。一つは、すべての生データを実験した日付がわかる状態で提出するように、という異例の要求だった。博士論文の実験の多くはハイバード大学で行われ、現在、私の研究に関する資料はハイバード大学に回収され保管されている。早稲田の調査委員会に私が入手できる限りの資料を提出したので、今はそれが提出できるものすべてだ。そのコピーも調査委員会から取り寄せる必要がある。そのことは事前に主査に伝えてあった。もう一つは、章立ての変更を元に戻し、エイプリルフル先生が担当した実験部分の詳細な説明とその説明を裏付けるデータをすべて提出することを要求された。この記述は論文の結論に影響を及ぼさないため、6月末の段階では、主査からすべて削除する選択肢も提示され、指導教官からも実験結果の章に記載しないことに同意をもらっていた。ところが、今回のコメントではこの記述に関する詳細な情報をつぶさに求められている。二つの要求とも、まるで私が答えられないことを探すための手続きのように感じた。

夜に指導教官から電話が来た。「これから、審査の先生方と何度かキャッチボールをすることになるのだと思う」と、自分とはまったく無関係なことのような口調で言われた。それから、「私はこれから双方を繋ぐアシストをする。バックアップに回る」という宣言を繰り返していた。指導教官としての指導はもうしない、という意思表示のように聞こえた。

2月16日(火)

私が新しく聞いた話もある。窃盗の疑いがあるというES細胞についての説明を受けた。報道された元留学生が作製したES細胞に加え、「ヒッポさんのもの2本」と写真を見せられた。その写真は理研の調査委員会の調査期間中、「持ち主不明のES細胞」と呼ばれていた細胞チューブだった。私は見知らぬES細胞が自分のサンプルボックスに入っていたことを知らされ、薄気味悪く思っていた。結局、「持ち主不明」と呼ばれたまま、調査は終了した。ともに公の場であるにもかかわらず、調査委員会で知りえなかった新事実を、事情聴取の場で聞かされた衝撃は大きかった。思わず刑事さんの話を遮って「ご本人の証言ですか?」と聞いてしまった。「そうです」と返事をされた。

ヒッポさんのだったんだ。盗まれたって言ったんだ。